

石見町文化財調査報告書 第15集

日和城跡調査報告書

1996年3月

石見町教育委員会



▲ 調査区中央部ピット群（北から）

郭先端部盛土粘土層検出 ▼



序

石見町には城跡がいくつかありますが、その一つ日和城跡には江戸時代末期に地区住民によって建立された金刀比羅宮があり、爾来氏子をはじめ地域の人々の手によって護り継がれていますが、平成6年になって石造の鳥居が倒壊したため、氏子達の間で鳥居の改築にあわせ社殿の修繕が計画されました。

しかし、資材を搬入する道路がないため参道を兼ねた作業道を新設することになり、計画路線に沿って調査した結果、城郭の一部を破壊する恐れがあり島根県文化財課並びに広島大学工学部助教授の三浦正幸氏や島根県文化財保護指導員吉川正氏の協力をいただき発掘調査を実施したものです。

本町では城郭の発掘調査は初めてのことであり、また中世の山城の発掘例も県下でも稀であります。今回の調査で戦国時代の山城の貴重な資料を得ることができました。発掘調査の最中には、氏子の方はもちろん多くの町民の方が発掘現場を訪れて、郷土史の話題で持ちきり、貴重な学習資料の提供にもなったと思います。

ここに発掘調査報告書を発刊するにあたり、調査にお力添えいただきました関係各位に対し深く感謝申し上げる次第であります。

平成8年3月

石見町教育委員会
教育長 三浦 勇

例　　言

1. 本書は、金刀比羅宮修繕工事に伴い、石見町教育委員会が実施した日和城跡発掘調査の報告書である。
2. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体	石見町教育委員会
調査員	川原和人（島根県文化財課主幹）
調査補助員	寺脇隆彦（石見町教育委員会文化係長）
	沖野拓矢（石見町教育委員会主事補）
調査指導	吉川 正（島根県文化財保護指導員）
	今岡一三（島根県文化財課主事）
事務局	三浦 勇（石見町教育委員会教育長）
	三宅幸徳（石見町教育委員会社会教育課長）
遺物整理	松川小枝（臨時職員）
	松川恒子（臨時職員）
3. 広島大学工学部助教授・浦正幸氏に日和城の掘立柱建物等について検討を依頼し、その原稿を掲載した。
4. 発掘調査および遺物鑑定に際しては、西尾克己、錦田剛志（島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター）、本間恵美子（島根県立八雲立つ風上記の丘）、寺井毅（島根県中近世城館研究会）、津野仁（栃木県埋蔵文化財センター）、遠藤浩巳、中田健一（大田市教育委員会）、池田浩、駅場春樹（石見町文化財保護審議委員）はじめ地元金刀比羅宮氏子関係者の方々には、多大なご教授ご協力をいただいた。記して感謝したい。
5. 調査にあたり協力および従事していただいた方は、次のとおりである。
坂根和子、横山ヨシノ、原野千恵子、石橋佐和子、大屋カズヨ、喜川サダエ、秋田寛三、高畠重幸、岩根久枝、上田嘉津枝、寺本孝行、砂田シナヨ、砂田彰義、駅場豊子
6. 本書で使用した造構略号は次の通りである。

S D - 溝状造構、S B - 掘立柱建物跡、S K - 土壙、S F - 櫃列、S X - 不明造構、
P - ピット
7. 指図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。矢印（N）も同様な方向を示す。
8. 遺物の実測は寺脇隆彦、松川恒子、沖野拓矢があたり、遺物写真は寺脇隆彦、沖野拓矢が撮影した。
9. 本調査で出土または採集した遺物及びこれに係る実測図・写真は、石見町教育委員会で保管している。
10. 本書の執筆・編集は寺脇隆彦が行った。これをなすに当たり関係各氏のご教示に対して記して謝意を表する次第である。

日和城跡発掘調査報告書

目 次

序

	頁
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章 調査の概要	8
(1) 郭先端部の構造について	
(2) 遺構について	
(3) 出土遺物について	
第4章 まとめ	27
付 論 日和城の掘立柱建物等について	28

図版・挿図目次

- 図版 1 a. 日和城跡遠景 b. 調査前全景（北から） c. 調査前郭先端部（南から）
- 図版 2 a. 調査地から吉川陣城方向 b. 表土除去後 c. 郭先端部（南から）
- 図版 3 a. 郭先端部（北から） b. 郭先端部セクション（西から） c. 同（南から）
- 図版 4 a. 郭先端部石積（南から） b. 同（北から） c. A-A' 断面
- 図版 5 a. C-C' 粘土層断面 b. F-F' 表土除去前断面 c. 郭先端部石積断面
- 図版 6 a. 郭先端部石積（東から） b. D-D' 石積断面図 c. 全景（南から）
- 図版 7 a. ピット検出状況 b. P53検出状況 c. ピット検出状況
- 図版 8 a. ピット検出状況 b. SX01検出状況 c. SD01断面
- 図版 9 a. SD01完掘（南から） b. 烏居基礎半碎状況 c. 烏居基礎半碎状況
- 図版10 a. 烏居基礎完掘 b. SX02木片検出状況 c. SX03木片検出状況

図版11	a. ピット群全景（北から） b. 郭先端部ピット群検出状況 c. SB 0 2（北から）	
図版12	a. SB 0 2（西から） b. SB 0 3（北から） c. 同（西から）	
図版13	a. SB 0 4（北から） b. 同（西から） c. SB 0 5（北から）	
図版14	a. SB 0 5（西から） b. 作業風景 c. 現地説明会	
図版15	a. 日和城跡山上遺物 b. 同	
図版16	a. 日和城跡出土遺物 b. 同	
第1図	日和城周辺遺跡位置図……………	5
第2図	日和城跡と古川（毛利）陣城跡周辺地形図……………	6
第3図	日和城縄張図……………	7
第4図	日和城跡調査前地形測量図……………	8
第5図	日和城跡調査後地形測量図……………	11
第6図	郭先端部土層図……………	13
第7図	郭先端部土層図……………	14
第8図	S F 0 1 実測図……………	16
第9図	SB 0 1 尖測図……………	16
第10図	掘立柱建物配置図……………	17
第11図	SB 0 2 実測図……………	19
第12図	SB 0 3 実測図……………	19
第13図	SB 0 4 実測図……………	20
第14図	SB 0 5 実測図……………	20
第15図	S F 0 2 実測図……………	21
第16図	S X 0 1 実測図……………	21
第17図	S D 0 1 実測図……………	22
第18図	鳥居基礎実測図……………	23
第19図	S X 0 2 実測図……………	23
第20図	S X 0 3 実測図……………	23
第21図	日和城跡山上遺物実測図……………	25
第22図	日和城跡出土遺物実測図……………	26

第1章 調査に至る経緯

日和城跡は、島根県邑智郡石見町大字日和 3,121番地にある。同城はこの地域を治めていた寺本氏の居城といわれ、満延元年（1860）同城跡に日和住民によって金刀比羅宮が造営された。平成6年に金刀比羅宮前庭の石鳥居が倒壊し、日和地区金刀比羅宮氏子によって鳥居の改築と社殿の修繕が計画された。この工事のため参道を兼ねた作業道の工事を建設業者に発注し工事が進められた。

平成7年7月21日に日和地区民の方から金刀比羅宮は城跡といわれているので調査をすべきではないかとの連絡が町教育委員会にあった。現地確認のため同城跡の調査を実施した結果、西側にある堅堀と思われる溝の手前まで作業道の工事が進んでいた。同日工事関係者と早急に協議を行いとりあえず工事の延期を要請し了解を得た。

平成7年7月26日に島根県文化財審議委員の吉川正氏と現地確認をした結果、計画の路線では遺跡を縦断するルートをとるため遺跡の破壊をまねく恐れがあり、同城跡の保存をはかる旨の協議を行った。しかし、工事がすでに発注され全体工事の70%近く進行し、日和地区民の要望もあり工事の中止はできない状況にあった。そのため同城跡の保存を考慮して当初の計画路線を変更し堅堀と思われる溝手前で路線を迂回し、これまで使用されていた参道に取り付ける路線で氏子代表者と協議を行った。路線変更によりこれまで使用されていた参道部及び金刀比羅宮前庭の調査を町教育委員会において行うこととなった。平成7年9月1日調査を開始、平成7年9月29日に完了した。



日和城跡調査区全景（南東から）

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

島根県邑智郡石見町は、島根県のほぼ中央部に位置している。町中央に京太郎山があり同山から延びる稜線によって、南に於保地盆地、西に日貫、北に日和盆地に区分され集落が形成されている。

この一帯は「中国太郎」とも呼ばれる江の川水系に属するが、細かく見れば町中心部は濁川上流域に当たる。濁川上流域は町の中心をなす於保地盆地を形成し、平地の少ない石見山間部にあっては比較的恵まれた水田地帯となっており、その盆地内には大規模な集落跡や墳墓群が分布し、遺跡の密集地として知られている。

日和地区は京太郎山(826.9m)、日野城山(716.4m)、帆柱山(593.1m)、鳶ノ子山(584.3m)に囲まれた盆地状の地形が広がっており、中心部の標高は約330mである。地区中央を日和川がほぼ直線状に西流して、千夫漢県立自然公園を下り桜江町市山で江の川支流の八戸川と合流する。前述の通り同地区は四方を山に囲まれた地形のため、交通の便が悪く、なかなか道路改良されない状況におかれていった。しかし、昭和63年から着工した邑南2期地区広域営農団地農道工事により交通の障壁となる山にトンネルを貫通する工事が進行し、地区は大きく変容しつつある。

日和城跡は、京太郎山から延びる稜線上に位置し、主郭部標高は約500mである。同城跡は、金刀比羅山城跡、琴平山城跡、鷹城跡、打綿城跡ともいわれているが、本報告書では字名である日和城跡とする。同城跡は南側に日和地区を北側には川本町方面を望め、また、丸山城跡、温湯城跡、熊ヶ峠城跡、牛の市城跡等を望むことができる。日和地区における遺跡は、分布調査が実施されていないため、古墳時代以前のものは現在確認されていない。しかし、町内には旧石器時代の遺跡があり、今後同地区においても古墳時代以前の遺構や遺物が発見される可能性が考えられる。同地区における古墳時代の遺跡として城ノ前古墳（横穴式石室）、大畠古墳群（横穴式石室）や、大畠遺跡（竪穴住居跡、土師器出土）、網田遺跡（須恵器出土）が確認されているが、発掘調査もされないまま既に破壊されて現存しない。

中世の遺跡として、熊ヶ峠城跡、日和城跡、そのほか日和地区の中央部の上郷と下郷の間にある山の山頂にある城跡（城名不明、字名は城ヶ前）や日和城跡の東南方向にある吉川陣城跡が発見されている。また城に関係があると思われる地名として日ノ城、高城、鬼ヶ城などがある。そのほかには鉛跡などの製鉄関連遺跡も多数確認されている。

今回調査を行った日和城跡は、平安末期より応永21年（1414）まで江川流域に勢力をもちこの地方を治めていた土屋氏（桜井氏）一族の所領の一部で、一族の大場氏（大庭氏）により築城されたものと思われる。土屋氏の居城は桜江町田津にあった鎧腰城で、日和城跡は、鎧腰城の南に位置している。

応永21年（1414）土屋氏内紛（都治騒動）が起こり、幕府命を受けた山名氏明の指揮のもと近隣の諸族が討伐軍を編成し土屋氏討伐を行った。上屋宗信の居城である鎧腰城は要害堅固で容易に攻略できないため遠攻にし、市山の江尾城、谷住郷の宮山城、日和の日和城を向い城とし討伐を行った。この討伐によりそれまで日和を治めていた土屋領は、次のように預けられた。

川戸、有福、波賀

山名氏明

市山、日貫	福屋氏兼
住郷、上津井（松川地内）	周布兼宗
上都治、下都治	京都烏丸大納言
日和、大貫（川越地内）	小笠原長教

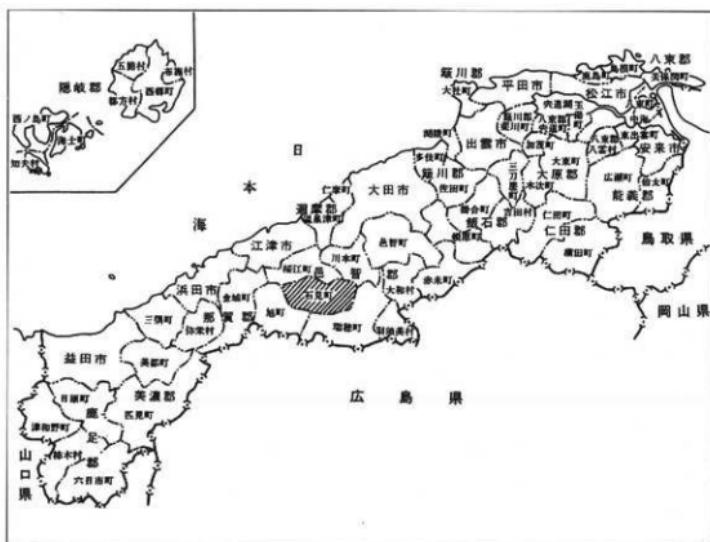
のことにより日和地区は小笠原氏預かりとなり、小笠原氏家老の寺本氏がそれまで居城していた瑞穂町大字八色石の銭宝城から日和城に移り日和地区を治めることになった。天文20年（1551）大内義隆が滅ぼされると、石見地域も大混乱となり近隣の諸族の小競り合いが繰り返された。日利においても天文22年（1553）に小笠原氏と福屋氏の紛争（日和合戦）が起こった。弘治元年（1555）毛利氏の石見征服が始まると尼子氏と関係がある小笠原氏は毛利軍と争った。弘治3年（1557）毛利軍の吉川氏は川本の小笠原氏居城である温湯城攻めるにあたり、まず日和の寺本氏攻略から始めた。京太郎山より延びる日和城に面する南東尾根筋（字名吉川尻、吉川平）の日和城に面した側に陣城を築き日和城攻略を行ったが成功しなかった。翌年永禄元年（1558）再度進軍し、寺本氏は毛利氏の軍門に降った。敵陣に近い尾根筋に陣をしき威圧をかける毛利氏の戦略は赤木町の瀬戸山城、江津市の松山城、八雲村の高津場番城、松江市の真山城などに見られる。日和を奪われた小笠原氏は日和奪回のため出撃したが、先に毛利軍に降伏していた寺本、河辺両氏により阻まれて敗退した。このことにより寺本氏は毛利配下となり日和地区を治めることとなる。しかし、毛利家は慶長5年（1600）関ヶ原合戦後防長移封となつたため、毛利家家臣は防長への移住及び帰農を余儀なくされた。のことから寺本氏一族も他へ移住及び帰農し、日和城も廃城となったと思われる。

参考文献

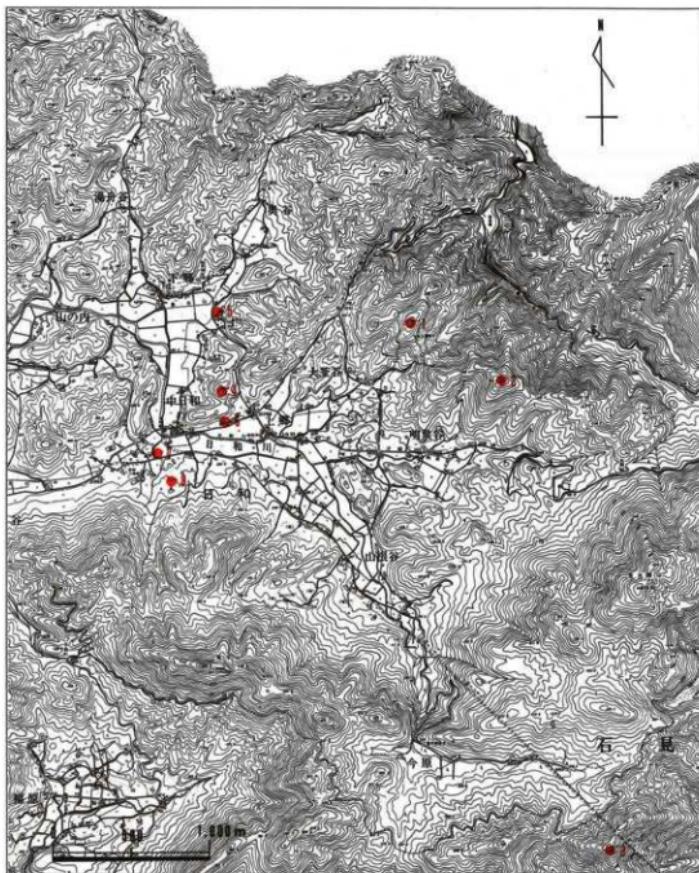
- 石見町『石見町誌』上巻 1972年
- 瑞穂町教育委員会『瑞穂町誌』第二集 1986年
- 瑞穂町教育委員会『瑞穂町誌』第三集 1976年
- 川本町教育委員会『川本町誌』 1977年
- 桜江町『桜江町誌』下巻 1973年
- 羽須美村『羽須美村誌』 1963年
- 森脇太一『邑智郡誌』 1937年
- 森脇太一『続邑智郡誌』 1976年
- 天津 亘『石見誌』 1925年
- 島根県『島根県誌』第6巻 1972年
- 『陰徳太平記』卷三十二
- 『姓氏家系大事典』第二巻 1963年
- 『日本城郭体系』14 新人物往来社 1980年
- 吉田郷土史調査会『毛利氏小事典』郡山文庫叢書第1集 1986年
- 石見町教育委員会『石見町の遺跡』 1983年
- 島根県中近世城館研究会『島根県中近世城館研究会報』1996年度第1号 1996年



日和城跡全景（吉川陣城から）

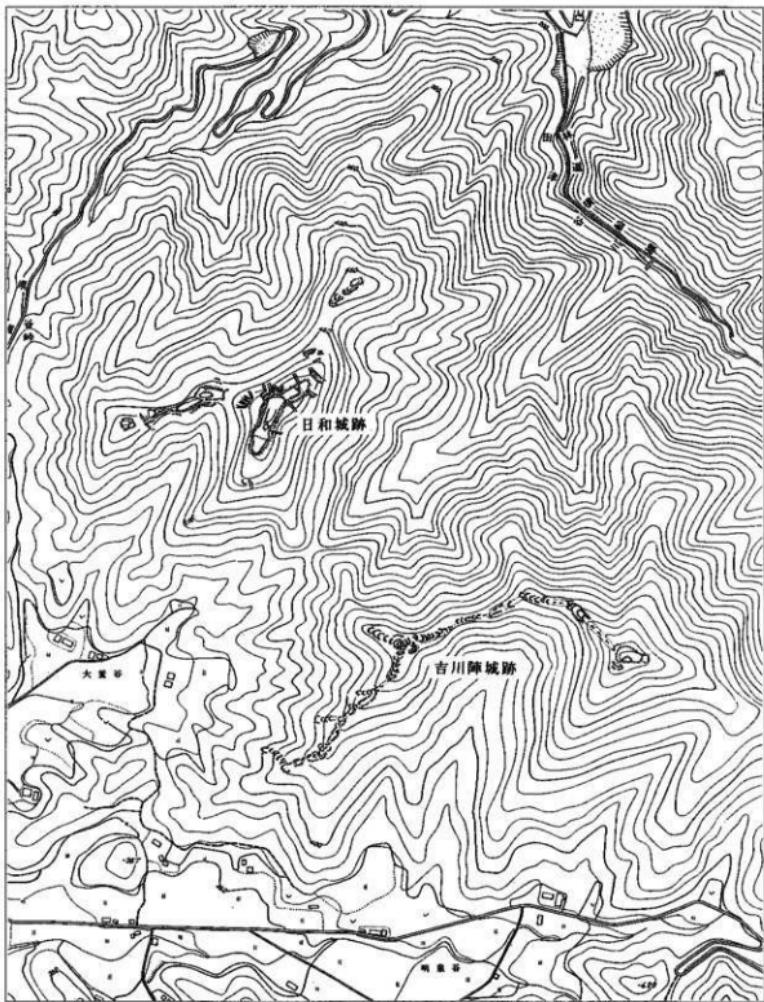


石見町位置図

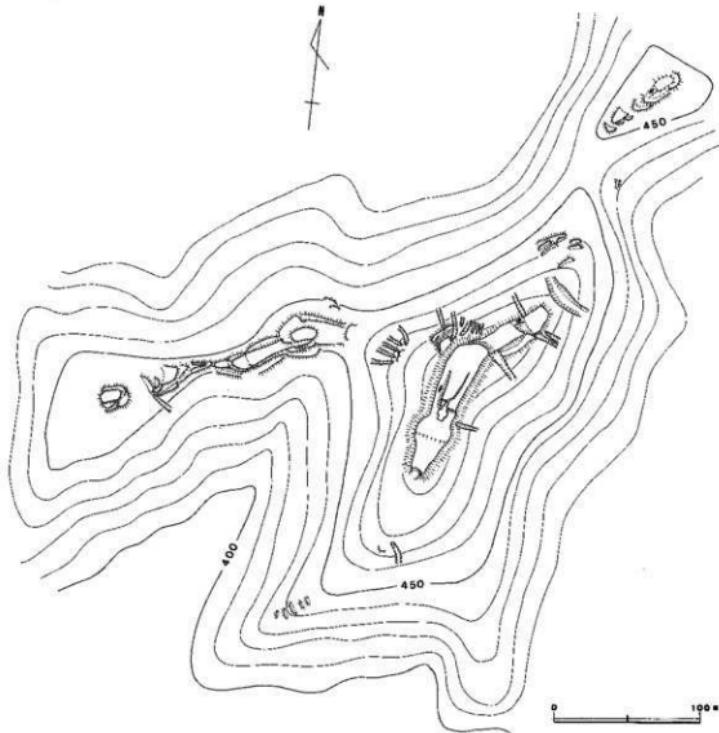


第1図 日和城周辺遺跡位置図

1. 日和城跡
2. 吉川陣城跡
3. 熊ヶ峠城跡
4. 城跡（遺跡名不明）
5. 銅田遺跡
6. 城ノ前古墳
7. 大畠古墳
8. 大畠遺跡



第2図 日和城跡と吉川（毛利）陣城跡周辺地形図 (1:10,000)



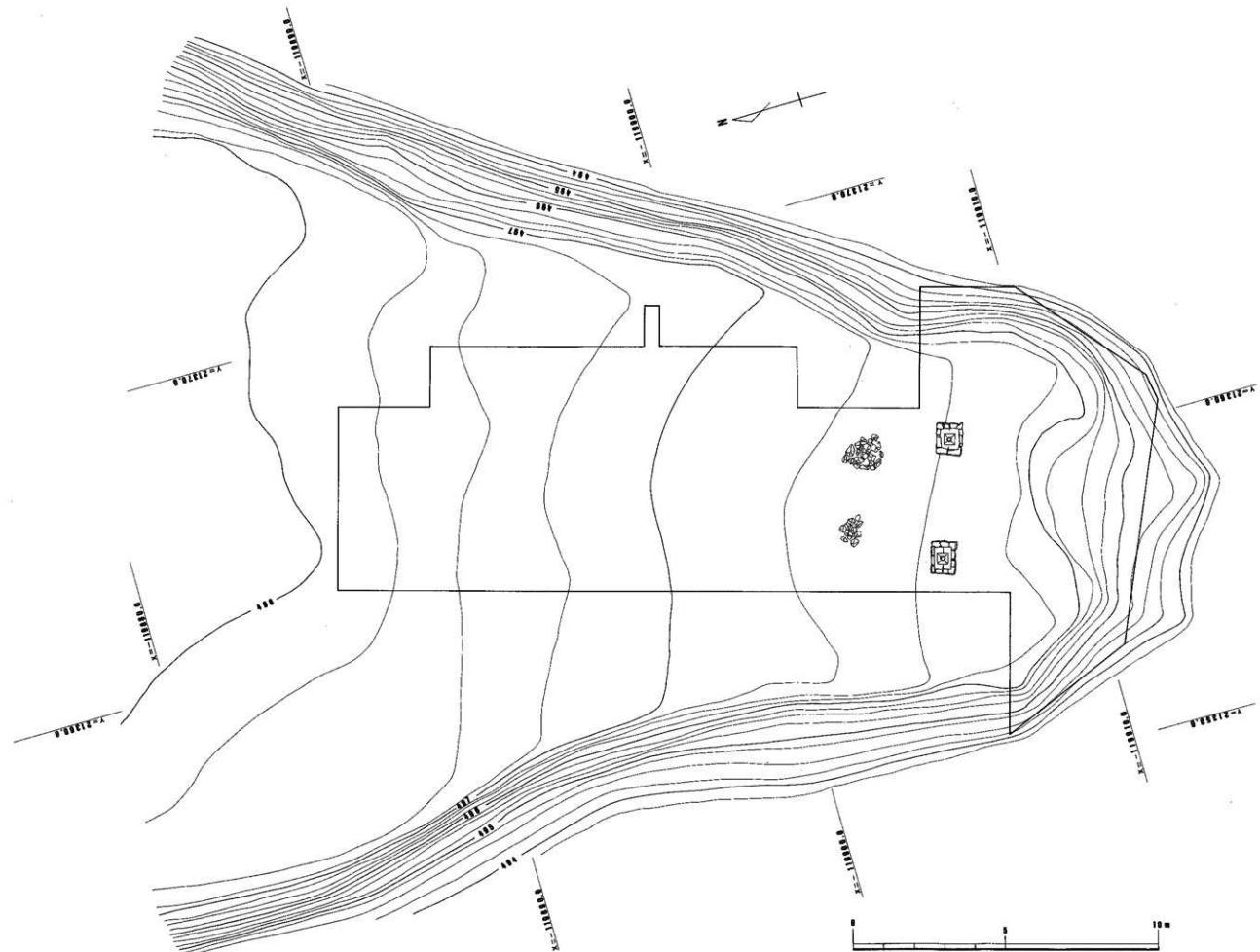
第3図 日和城縄張図

第3章 調査の概要

本城跡は、山頂中央部に南北に約40m、東西に約10mの平坦面があり主郭と推測できる。この主郭を中心には北側、南側、西側の尾根に郭がある（第3図）。山頂中央部の郭は主郭を中心には北側の2段及び南側の2段は広く削平されているが、山頂中央部以外の郭は、小さな郭を尾根に階段状に配置している。このような地形から何度かの改築を行い現状になったと思われる。西側に伸びる尾根にある削平地は連続壁堀により遮断されており、古い形態の城跡と考えられ、城の改築によって放棄されたと思われる。今回の調査範囲は、主郭の南側で2段目に当たる位置の郭部先端及び金刀比羅宮前庭について、遺物及び遺構、また郭部構造等の検出を目的として地山面まで掘り下げ調査を行った。調査地は、金刀比羅宮前からやるやかな傾斜があり金刀比羅宮造営のため削平された可能性もある。土層の状況は、平坦面の中央部では金刀比羅宮前庭のため、ほとんど表土（灰色砂質土）がなく5～10cmで地山面で場所によっては地山が露出している。調査区平坦面は日和城築城面に近い面と考えられ、郭両先端部においては両側に盛土と思われる層が残存していた。遺構は、平坦面において建物跡及び柵列と思われるピット群、土壙、溝状遺構を検出した。遺物は、平坦面上及び盛土中において陶磁器10点、鉄製品4点を検出した。



調査区全景（南から）



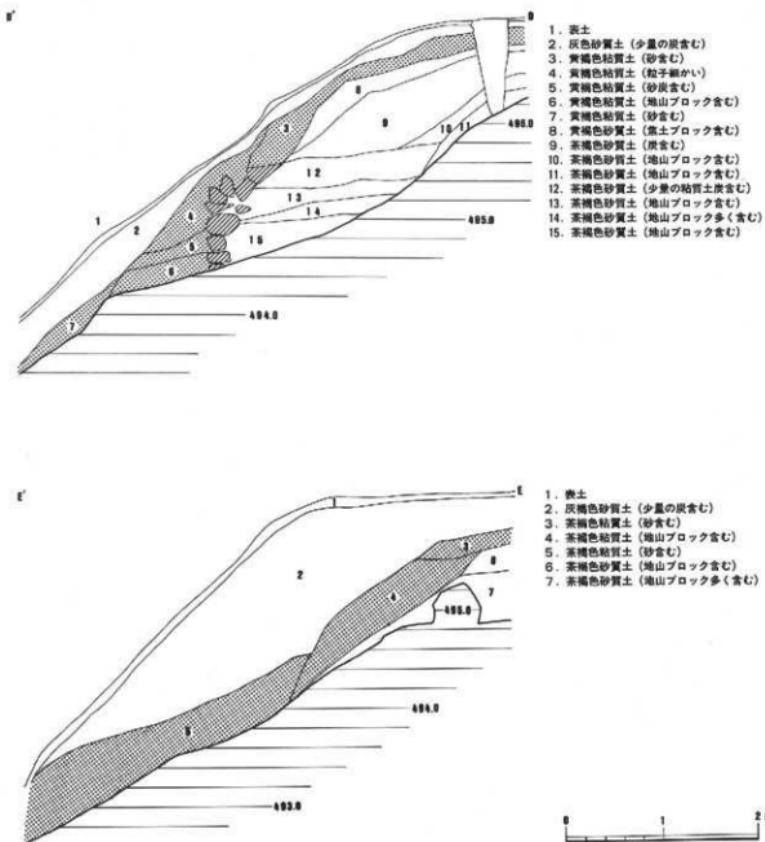
第4図 日和城跡調査前地形測量図



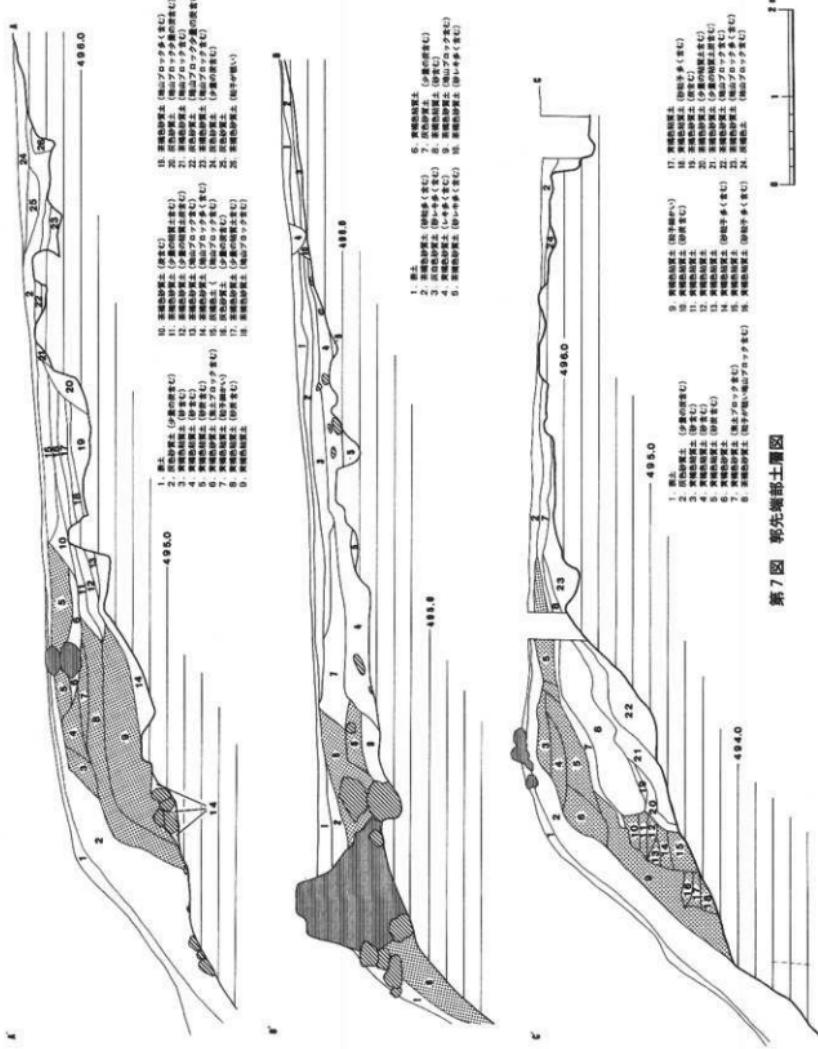
第5図 日和城跡調査後地形測量図

(1)郭先端部構造について（第6図、第7図）

郭先端部は、金刀比羅宮の参道開設時に地山面まで削られ、一部しか原形をとどめていなかったが郭先端部の両側は残存していた。郭先端部の両側は約10cmの表土がありその下層を大別すると、灰色土層、黄褐色及び茶褐色の粘質土層、茶褐色及び灰色の砂質土層の3層に分けることができる。



第6図 郭先端部土層図



第7図 邪先端部土壌図

1. 灰色砂質土層

郭部の中央平坦面より両端斜面にかけて盛られた盛り土で粘土質層上面の南東側廓先端部のセクション（C-C'）で約20cm、斜面で約40cm、南西側廓先端部（E-E'）で約120cm、斜面で110cmの厚さの土層である。この土層は平坦面の拡張のため盛られたと考えられる土層で、検出面で南東側に約60cm、南西側に約150cm、平坦面を拡張している。この層中より16世紀の磁器片3点が検出され平坦面拡張時に混入したためと考えられる。

2. 黄褐色及び茶褐色の粘質土層

郭部の斜面にかけて盛土の流出及び高さの確保のため盛られたと推測できる盛土で、郭部斜面を包むように盛られ、特に郭部先端は粘質土層の内側に石を積み上げて郭先端部を補強している。

また南東側粘質土層のセクションでは、粘質土層がブロック状に検出でき粘土を積み上げたためと思われる粘質土層の内側は砂質土層で炭化物及び焦土ブロックを多く含んだ層があり郭部平坦面を拡張するため旧平坦面を削平した土を使用したと考えられる。粘質土層上面より鉄製の遺物が3点出土した。

3. 茶褐色砂質土層

砂質土の中に地山ブロックと炭化物を含む土層で粘質土層の内側にある。城の盛土として盛られた土で尾根を削平したときのものと考えられる。

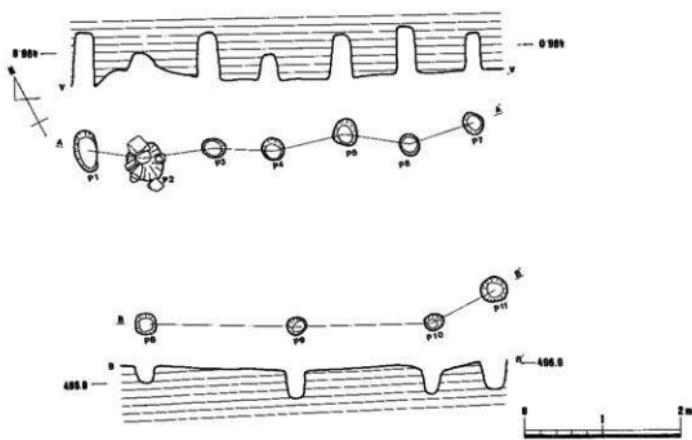
(2)遺構について

主郭南側に2段の郭があり、2段目の平坦部において城に伴うピット群と土壤（S X 0 1）及び口和城跡以外と考えられる遺構を検出した。

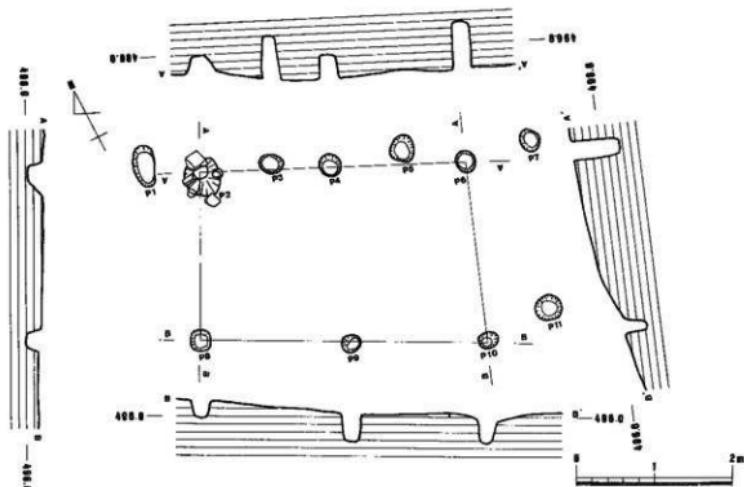
口和城に伴うピット群は、主郭南側の2段目郭で調査区の南先端部で11基、調査区の中央より北方向において62基を検出した。

郭先端部のピット群は、金刀比羅宮参道開設時に掘削された郭先端部の堅い地山面で検出した。ピットは東西方向に7基と4基が二列に並んで検出し中央ピット群に比べ深さ、並びが不規則で掘列と考えられる。ピットは大型のもので径40cm、深さ60cm、小型のもので径20cm、深さ30cmを測る。ピットの埋土は灰色の砂質土層よりも柱痕は確認できなかった。またピットの位置が尾根の先端にあり（第5図）、S B 0 1（第9図）の見張り櫓と考えられるものがあったとも推測できる。

S B 0 1は郭先端部において検出した建物跡で、南北方向尾根上に棟のある建物で堅い地山面に柱穴を掘り込んだ掘立柱の建物である。東西（桁行）2間で3.7mあり、南北（梁間）で2.3mの規模をもつ。柱間は東西方向で1.68～1.95mあり不揃いである。ピットは径20～40cm、深さ18～60cmを測る。ピットの埋土は灰色のやや粘土質の粒子の細かい砂質土で炭化物を含む柱痕は確認できなかった。



第8図 SF 01実測図

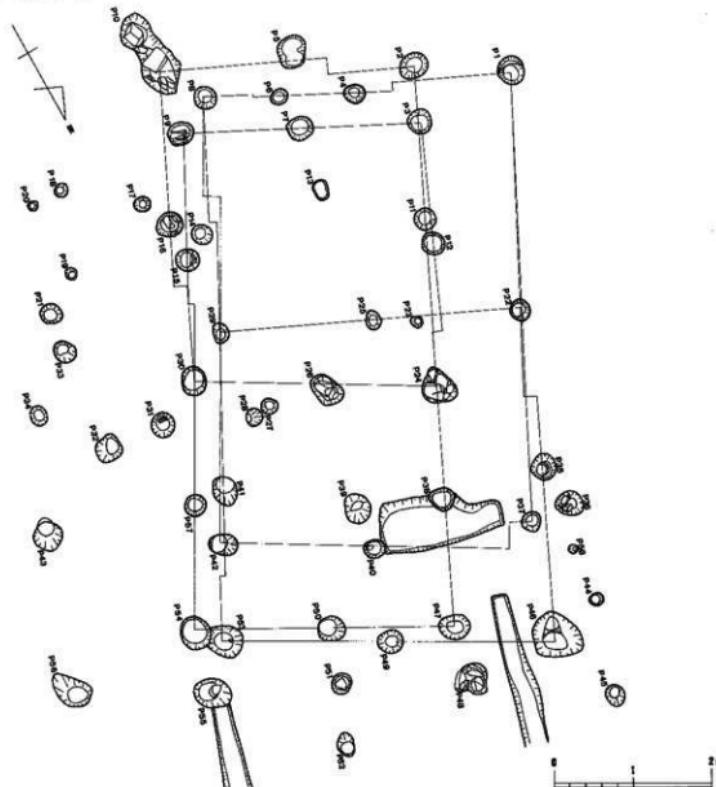


第9図 SB 01実測図

中央部の遺構について

このピット群は、ピットの配列が南北方向及び郭先端部の面に平行であることから一定の期間内に2回以上の建て替えが行われたと推測できる。建物は南北に長く、建物規模はピットの配列から推定してSB02、SB03、SB04の建物跡と推測でき、この建物以外にもSB05を考えられる。

建物の建築順は、ピットの埋土の切り合いによると、P53とP54はP53がP54の埋土に掘り込まれている。またSX01に接したP38とP40とでは、P38はSX01に掘り込まれ、SX01の検出面では検出できなかった。よってP54を使用した建物とP53を使用した建物とではP53を使用した建物が新しく、またP40とP38とではP40を使用した建物が新しいと考えられる。(SB02→SB04→SB03)



第10図 掘立柱建物配置図

S B 0 2について（第11図、図版11c・12a）

中央ピット群の中で当初に建築されたと推測できる建物跡である。南北（桁行）4間で約6.3m、東側柱間は等間隔、西側柱間は1.45～1.8mで不揃いである。東西（梁間）2間で約3.1m、南北方向の柱間距離はほぼ等間隔である。また中央にピットがあり二間に仕切られた建物と推測できる。ピットは径27～50cm、深さ10～70cmを測る。

S B 0 3について（第12図、図版12b・c）

S B 0 3はS X 0 1に接したP38とP40との切り合いからみてS B 0 2より後に建てられたものと考えられる。建物規模は南北（桁行）2間で約5.7m、東西（梁間）で、柱間距離は東西方向で1.9～2.04m、南北方向で2.72～3mであり、ほぼ等間隔である。中央にP25があり二間に仕切られていたと考えられる。ピットは径17～40cm、深さ22～80cmを測る。

S B 0 4について（第13図、図版9c）

S B 0 4は南北（桁行）3間で6.89m、7.24m、東西（梁間）で3.86～4.26mの規模をもつ。P29を結ぶ線上にP25があり二間に仕切られ、柱間は北側2間が約2m、残り1間が約3mの規模をもつ建物と推測できる。ピットは径24～56cm、深さ30～73cmを測る。

S B 0 5について（第14図、図版10a）

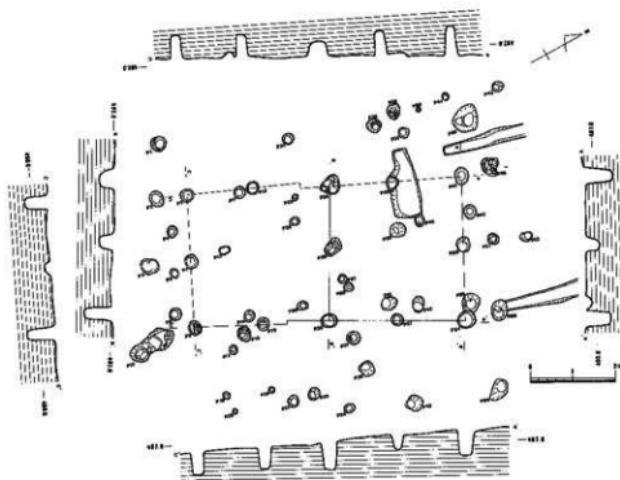
S B 0 5は中央ピット群の南に位置し、南北（桁行）2間の約4m、東西（梁間）約3.2mの規模をもつ建物と考えられ、中央部における規模としては最も小さい。桁行の柱間距離は169～213cm、梁間で148～168cm。柱穴は径25～65cm、深さ27～65cmを測る。

その他のピットについて

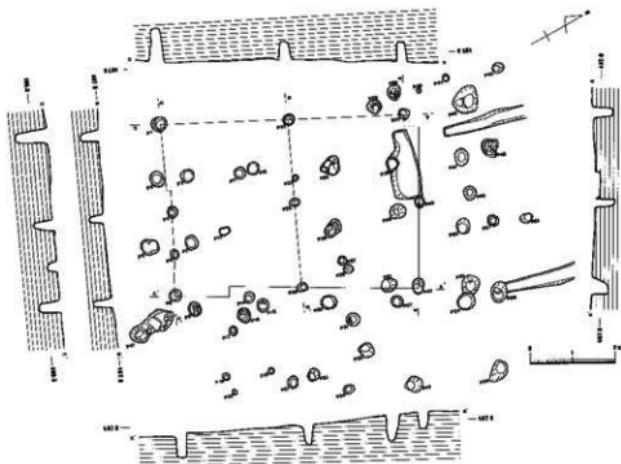
調査区の南東側に建物以外と思われるピットが多数確認された。このピット群は毛利軍が同城を攻めるために陣城を築いた山に面した場所で確認され、日和城攻略時に使用された柵列の可能性もある。その他に第15図は柵列と考えられるが、P48、P51、P55はS B 0 2の軒跡とも考えられる。

土壙（S X 0 1）について（第16図）

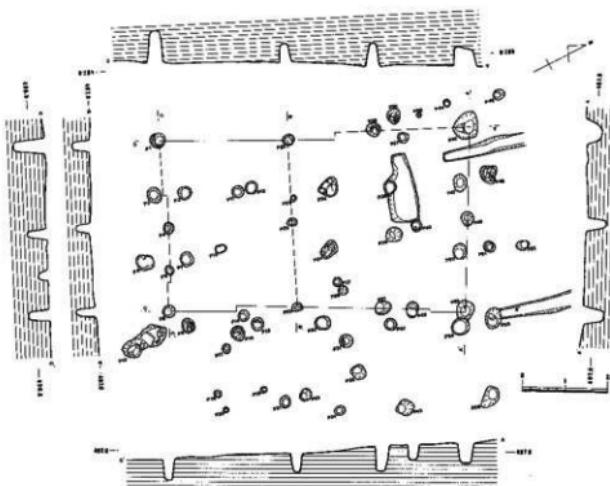
S X 0 1は中央の平坦面で検出された。検出面で東西160cm、南北70cm、深さは21cmあり、埋土は灰色でピット埋土とはほとんど同質である。形状は不規則でP40と切り合い、P38に掘り込まれていた。用途は不明である。



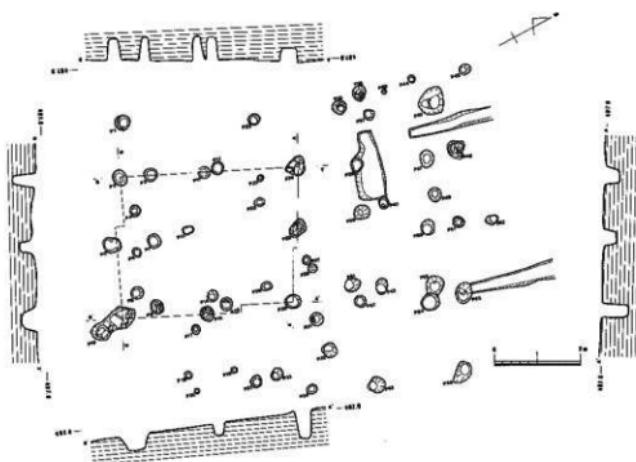
第11図 SB 0 2 実測図



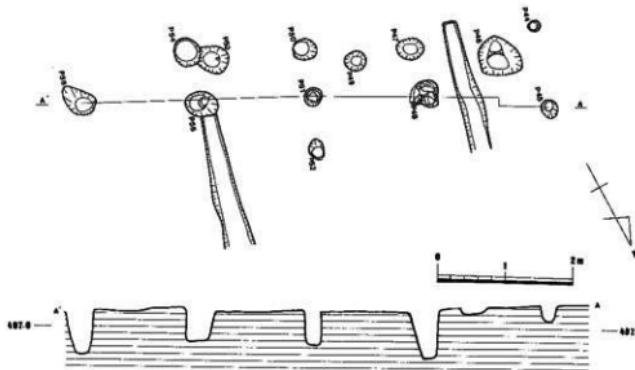
第12図 SB 0 3 実測図



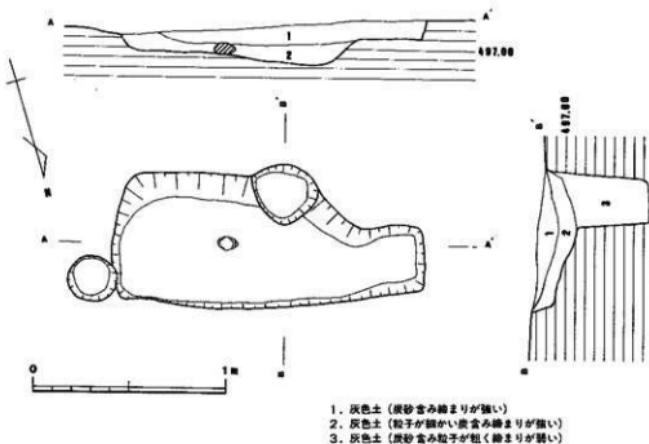
第13図 SB 0 4 実測図



第14図 SB 0 5 実測図



第15図 SF 02 実測図



第16図 SX 01 実測図

日和城跡以外と思われる遺構は、調査区の北側平坦面で検出した SD 0 1、鳥居の基礎及び SX 0 2、SX 0 3である。

SD 0 1について（第17図、図版7a、7c）

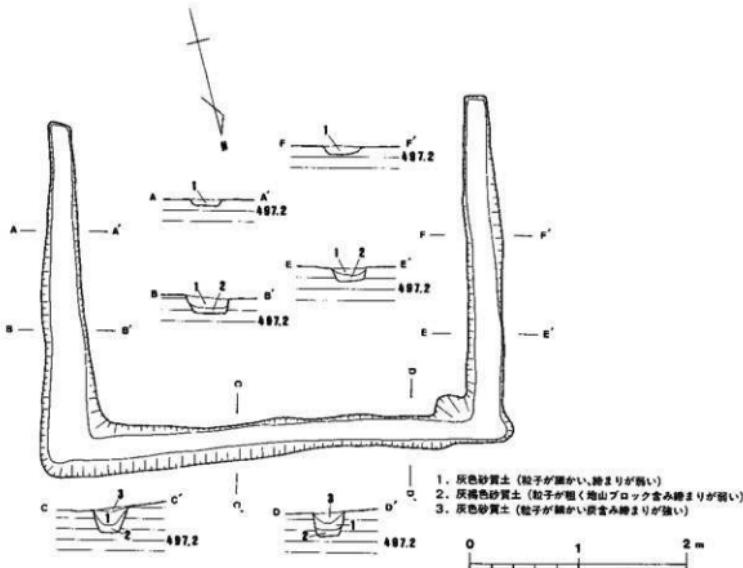
SD 0 1は調査区の北側において金刀比羅宮のほぼ同軸に位置し、東西に約3.8mあるコの字状の溝状遺構である。溝の底面はほぼ水平で溝の底面幅は約20cmである。埋土は砂質土で地山ブロックを多く含み掘削後に早い段階で埋め戻されたと思われる。またピット埋土（灰褐色土）面に掘り込まれている。

鳥居の基礎について（第18図、図版8a）

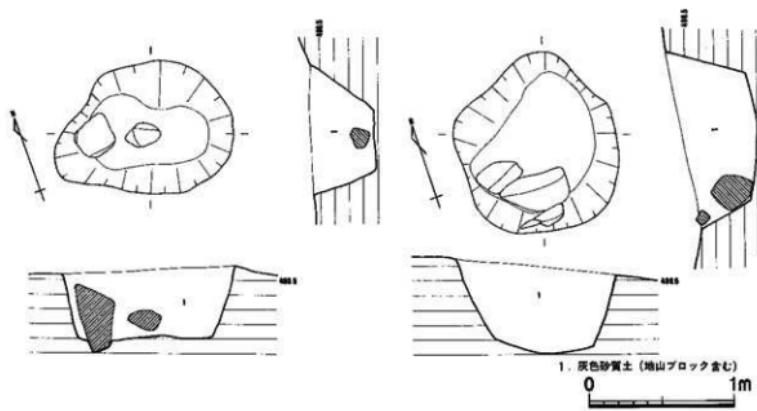
鳥居の基礎は、調査区の南側平坦面に金刀比羅宮とほぼ平行に掘られ、幅は約100cm深さは約60cmである。今回倒壊した鳥居は基礎部分が約15cmしか埋まっておらず、今回倒壊した鳥居以前にも鳥居が建てられていたと考えられる。

SX 0 2（第19図、図版8b）、SX 0 3（第20図、図版8c）について

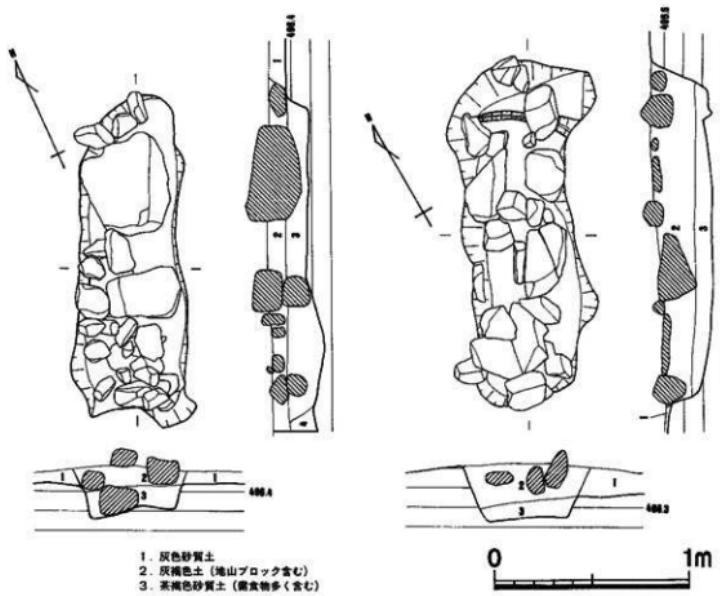
SX 0 2、SX 0 3は一对の遺構と考えられるが用途は不明である。これらの遺構は鳥居の基礎より南西側にあり、金刀比羅宮にほぼ平行で石の下に木材痕を残す。埋土は腐食物を多く含みピット埋土と比べてしまが弱い。用途は不明である。



第17図 SD 0 1 実測図



第18図 鳥居基礎実測図



第19・20図 SX 02・SX 03実測図

(3)出土遺物について

遺物は表土中及び郭先端部の盛土中において検出し、日和城に伴うものと考えられる遺物と金刀比羅宮に伴うものと考えられる遺物に分けることができる。

日和城に伴うものと考えられる遺物は、陶器片5点、磁器片1点、青磁片1点、鉄製品4点が出土し、いずれも小片である。

陶器片（第21図1～5）

陶器片（1～5）は、5点とも備前焼の破片である。調査区中央平坦面の表土中から1、2が出土した。

1は壺（甕の可能性もある）の口縁部で外反し玉縁の形態をとる。色調は表面が淡茶褐色、素地は灰色で備前のV期¹¹にあたる。2は1と同時期の胴部と考えられる。郭先端部の盛土の灰色砂質土層中から3～5が出土した。色調は、灰色で壺、甕の胴部と思われるが小片のため形状は不明である。

磁器片（第21図6）

6は郭先端部の表土中から出土した中国染付葵司底皿の破片で16世紀¹²にあたる。破片のため径、高さを測ることができない。

青磁片（第21図7）

調査区中央平坦面の表土中から出土した青磁碗（蓮弁文）の破片で16世紀にあたる。破片のため径、高さは測ることができない。

鉄製品（第22図8～11）

8、9は郭先端部の暗黄粘質土層上面から出土したものである。8は2組の鉄片（縦33mm、横20mm、厚さ2mmと縦20mm、横15mm、厚さ2mm）が重なったものと考えられる。この2組の鉄片には直径2mm程度の小孔が各6つ確認でき、穿孔間隔は横7.5mm、縦6mm程度である。出土状況から推測しても、当初から重なり合っていたものと考えられ、またレントゲン写真から推測した場合、甲冑の札で札頭を碁石頭とした伊予札の上部と考えられる。9は不明である。10は郭先端部の暗黄粘質土層中から出土しているが用途は不明である。11は釘で調査区中央平坦面P53の埋土中から出土したものである。

金刀比羅宮に伴うものと思われる遺物は、陶器片1点、磁器片2点が出土した。

陶器片（第22図12）

郭先端部表土中から出土した19世紀頃の徳利と考えられる。

磁器片（第22図13、14）

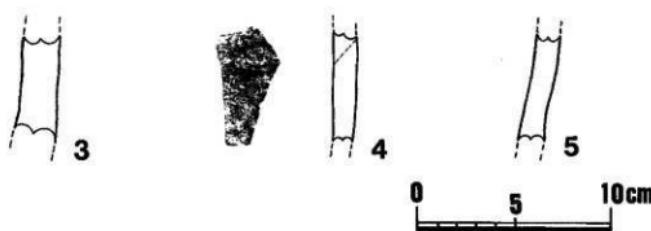
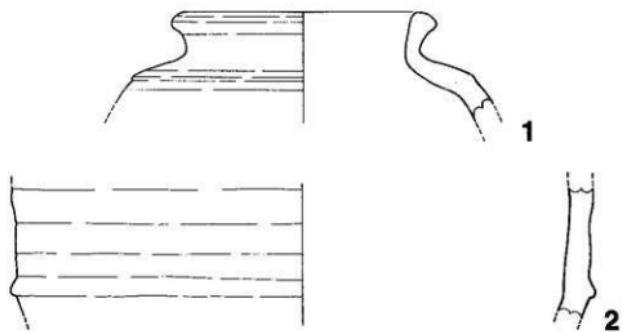
13は郭先端部表土中から出土した12と同時期の猪口と考えられる。口径6.89cm、高さ3.2cmある。

14は郭先端部表土中から出土した肥前磁器碗片で18世紀にあたる。口径は11.3cmある。

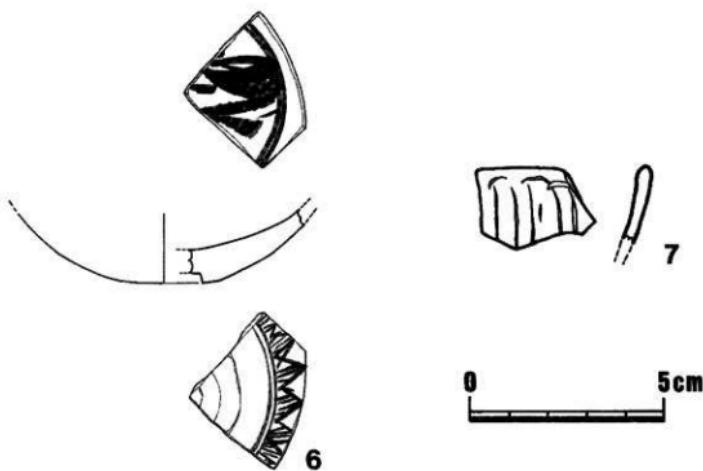
註

(1)間壁忠彦『備前焼』 ニュー・サイエンス社 1991年

(2)小田原市教育委員会『小田原城とその城下』 1990年

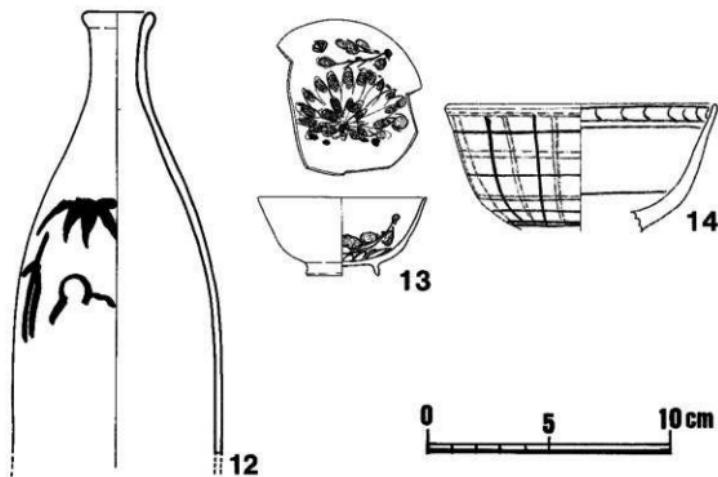
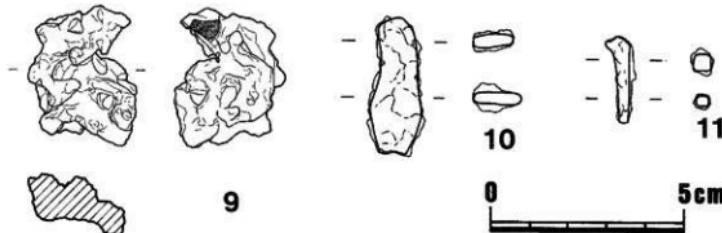
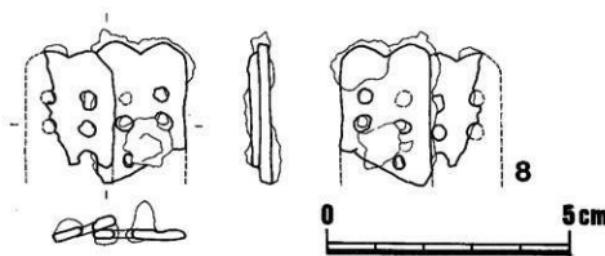


0 5 10cm



0 5cm

第21図 日和城跡出土遺物実測図



第22図 日和城跡出土遺物実測図

第4章　まとめ

今回の調査は、金刀比羅宮修復に伴う作業道を開設するため緊急に行ったものである。作業道の当初のルートは城跡を縦断する計画であったため、城の保存を考慮して現在使われていた参道に取り付けるルートに変更をお願いした。調査前の所見では、金刀比羅宮建設により城の郭先端部の形状が著しく変更されていると思われたが、調査の結果、推測していたよりも破壊されていないことが確認された。

日和城の歴史的背景は、当時の日和地区のことを直接語る文献がほとんど残っていないため石見町誌等に記載されていることより推測することしかできなかった。まず日和城の呼称について考えてみると、第2章で記述したように他に4種類の呼称があると言われている。そのうち金刀比羅山城跡、琴平山城跡は金刀比羅宮に由来があると考えられるが、鷹城、打綿城は日和地内にある城名不明の城跡の可能性も考えられる。また発掘調査から、日和城は少なくとも2回の立て替えが行われ長期間使用されていたと推測できる。また郭先端部の地層からも2回の造成が行われたと認められ、特に暗黄粘質土層を斜面に貼り付け、石垣で補強してあり防御のため郭先端の高さを維持するための構造であった推測できる。この層の上面より小札片が出土したこととは、この時期に武装した兵士がいたこととなり戦闘があったことも推測できる。日和のことが文献で述べられているのは、応永20年（1413）の土屋氏内紛（都治騒動）、天文22年（1553）の小笠原氏と福屋氏の紛争（日和合戦）、弘治3年（1557）～永禄元年（1558）の毛利軍の日和城攻略である。この内で応永20年及び弘治3～永禄元年の戦闘の記述がないため、日和城は天文22年の日和合戦のとき戦闘状態にあったと考えられる。

弘治元年より始められた毛利氏の小笠原討伐では、毛利家文書、及川「毛利元就」所収の記述の中に「日和落居こそ肝要に候へ、先々是非ともに芸備の衆融けられ候て然るべく候このまま河本へ取り懸り、はたと然るべからず候」とあり、毛利氏は小笠原氏を攻めるにあたり日和の寺本氏を先に攻めるよう指示していることが見て取れる。このことから日和城は重要な位置にあったことがうかがえる。

今回の調査では、出土した遺物から同城が寺本氏の居城として長期間使用されたことが確認され、当地域の歴史を明らかにしていくうえで貴重な資料を得ることができた。今後文献史学の諸様相を具体的に明らかにしていく必要がある。

日和城の掘立柱建物等について

広島大学工学部助教授日本建築専攻

工学博士 三浦 正幸

日和城は典型的な中世の山城であって、高い山頂に主要な曲輪群を配し、周辺に多くの小郭を從えている。その主要な曲輪群は、山頂の尾根伝いに北東から南西へかけてほぼ一列に並んでおり、そのうち比較的に面積の広い曲輪は五つに及ぶ。今回の調査区は、それらの一つであって、南西端を守備する重要な曲輪であった。地査区の曲輪は、南北にやや長い不整形な形状をなし、南を正面、北を背面とし、現状の地盤高も南に向けてやや低くなっている。

調査区においては、曲輪の南端近くに樅と思われる遺構（S F 0 1）、中央部に建物跡（S B 0 1～0 4）および柵（S F 0 2）の遺構と考えられる掘立柱柱穴が多数検出されている。また曲輪の南端の土塁（土居）も検出されており、ここではそれらについて簡単な解説をする。

建物跡については、数次の立て替えのため柱穴が交錯しており、建物ごとの判別は用意ではないが、次の4棟を想定できる。これら4棟はほぼ位置を重複して建てられたものである。

S B 0 2 (P 3・7・9・15・30・57・54・50・47・36・24・12・26)

南北棟の掘立柱建物で、桁行四間、梁間二間である。桁行中央に間仕切り柱（P 26）を持つので、南北二室からなることが分かる。柱間寸法は中世のものとしてはやや短く、4尺8寸から5尺9寸であり、5尺1寸から5尺3寸程度の均等の柱間として計画されたものが、施行誤差によって柱間寸法にはらつきが生じたと考えられる。屋根は、瓦が出土していないので、切妻造りの柿葺あるいは寄棟造りの草葺が想定される。遺構の検出状況から4棟の内では最古のものと推定され、また4棟の内でも最も整然とした柱配置を示している。遺構の検出状況から4棟の内では最古のものと推定され、また4棟の内でも最も整然とした柱配置を示している。

S B 0 3 (P 1・4・6・8・29・42・40・37・22・25)

桁行二間、梁間二間の南北棟の掘立柱建物である。南辺の棟柱間は間柱（P 6）を建てて半間に分割する。また、棟中央間仕切り柱（P 25）を設け、南北二室に仕切っていたらしい。桁行の柱間寸法は大きく、北柱間が9尺、南柱間が10尺に計画されたものと思われる。梁間は、柱間寸法のばらつきが大きいが、13尺を2つ割り、すなわち6尺5寸に計画しているようである。S B 0 1と位置的にほぼ重複しており、S D 0 1あるいはS D 0 2を建て替えた後身の建物と考えられる。屋根は同様に切妻造柿葺や寄棟造草葺であろう。

S B 0 4 (P 1・4・6・8・29・41・53・49・46・35・22・25)

S B 0 3の北辺の柱穴（P 42・40・37）の北方約1.5mに並ぶ柱穴（P 53・49・46）を北辺とする掘立柱建物で、S B 0 3の桁行一間の北室を二間に拡張したものである。すなわち建物全体では、桁行三間、梁間二間の南北棟となる。S B 0 3と同様に柱穴P 25を間仕切り柱としており、南北二室からなる。そのうち南室はS B 0 3と共通することになる。共通しない北室の桁行柱間寸法

は、東辺が約6尺5寸、西辺が約7尺と不揃いであり、また梁間の北辺も7尺間であって、南辺の6尺5寸とは合わず、粗雑な平面計画である。このようなSB03の北室を改造拡張してSB04が成立したと考えられる一方、SB03の間仕切り筋の柱穴(P22・25・29)を再度用い、それを建物の南辺としてその北方に二間四方の小屋(P22・25・29・41・53・49・46・35)を新設し、SB03の南室を廃止したものと推定することも可能である。前者をとった場合では、4棟中で最大のものであったことになり、屋根はSB03と同様に切妻造柿葺や寄棟造草葺が想定される。

SB05 (P2・5・10・16・30・26・24・11)

桁行も梁間も二間の小さな建物であり、建物北辺の柱穴(P24・26・30)は、SB01の間仕切りの柱筋の柱穴と共用されている。SB01の立て替えの際に、SB01の北室を廃し、南室をやり拡張してきた掘立柱建物と考えることができる。南北の柱間寸法は、東西のものよりやや長いので、南北を桁行としていたらしい。南北柱間は、P11とP24の間が7尺とやや長く、ほかは6尺5寸と考えられる。東西は平均すれば5尺2寸から5尺3寸ほどの柱間寸法となっていた。南北棟の切妻柿葺や寄棟造草葺の簡略な小屋である。

以上の4棟の掘立柱建物は、位置がほぼ重複しており、建物の軸線の方向も一致しており、また建物の規模や形式も大差がないとしてよいので、同じ用途の建物として順次再建を繰り返されてきたものと考えられる。城全体の中でも重要な曲輪のほぼ中央に存在してきた建物であるので、城内でも重要な建物の一つであったと考えられる。4棟とも梁間二間、桁行は二間ないし四間と比較的に小規模であって、一室あるいは二室よりなっており、掘立柱の中世の小住居を思わせる建物であって、城兵の宿舎、すなわち番小屋であったと推定された。中国地方の中世山城では、これと類似する建物跡がしばしば検出されており、一般的な例としてよいであろう。建築年代については、室町時代を通じて広く見られる形式であるので、特定の時期に決めることはできない。当城の激しい攻防が伝えられる16世紀中期に比定することも十分に可能である。本例のような比較的に簡略な掘立柱建物の耐用年限を10年ないし20年と仮定すると、4棟分ではおよそ半世紀から一世紀弱の存続期間となるので、15世紀中後期から16世紀中期頃までの存続と推定することもできよう。

次に櫛跡と考えられる遺構について述べる。

SF01 (P1・2・3・4・5・6・7)

曲輪の南端近くを東西南方向に仕切る櫛の親柱と考えられる掘立柱柱穴列で、六間分が検出されている。曲輪中央の掘立柱建物の東西南方向の柱筋とほぼ軸線の方向が一致するが、柱列の乱れは小さくなく、やや折れ線状に連なっている。柱間寸法は、2尺3寸から3尺ほどのばらつきがあるが、比較的に短い柱間寸法を用いているので、この櫛は堅固なものであったと考えられる。曲輪の入口を守備する櫛の一部であろう。なお、この櫛とほぼ平行に南へ7尺から7尺5寸ほど離れた柱列(P8・9・10・11)がある。P8とP2、P9とP4、P10とP6、P11とP7がそれぞれ相対しており、SF01と同時に存在した可能性も小さくない。この柱列も櫛の遺構と考えられ、SF01を補助して曲輪入口を固めていたと思われる。両者を一体に考えて建物跡とみなすことも不可能ではないが、その場合には、半間ごとの柱間とみなされるSF01の柱列が土壁の跡と考えられ、そのほかの3面の櫛面は一間ごとの開口部となり曲輪の端の建物とは考えにくい形状となる。

S F 0 2 (P45・48・51・55・56)

掘立柱のすぐ北 (SB01の北辺より北へ0.7mほど) に東西方向に一列に延びる掘立柱柱列であって、掘立柱建物の北辺と平行に位置する。柱間寸法は5尺5寸から5尺8寸である。その形状から柵の親柱が残ったものと思われる。調査区内では四間分検出されているが、さらに東西へ延びているものと考えられる。曲輪内の仕切として設けられたようである。

曲輪の南端で検出された土塁（十居）は、地山部分を除くと高さがほぼ2mであり、表面を粘質土で覆ったタタキ土居である。特に南西10m余りでは、粘質土の内側に人頭人の石を野面積みとした石垣（高さ1mほど）を包含させている。石垣の内側は砂質土で造成されているので、その土留めとして築かれた石垣であろうと考えられ、土塁の完成時には石垣は土塁の中に埋没して見えなくなっていたようである。土塁の築造工法としては丁寧であって、本城内でも防備上で重要な場所であったことがうかがえる。

図 版

図版 1
日和城跡遠景



調査前全景（北から）



調査前郭先塙部（南から）



図版 2

調査地から吉川陣城方向



表土除去後

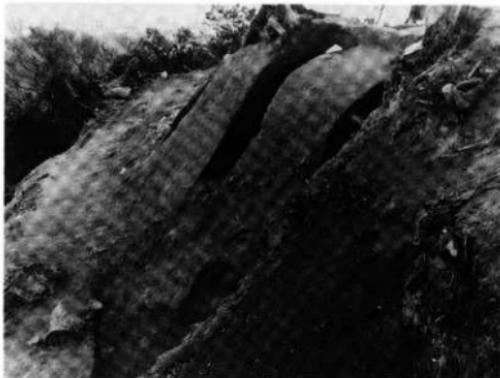


郭先塙部（南から）



図版 3

郭先端部（北から）



郭先端部断面（西から）



郭先端部断面（南西から）

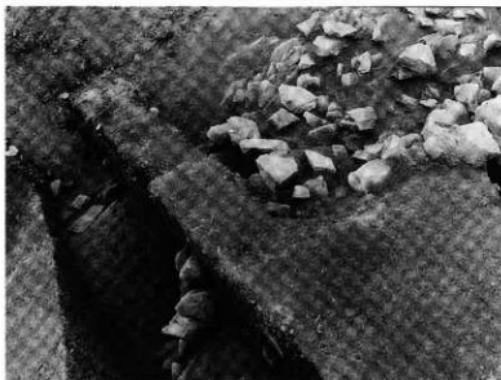


図版 4

郭先端部石積（南から）



郭先端部石積（北から）



A - A' 断面



圖版 5

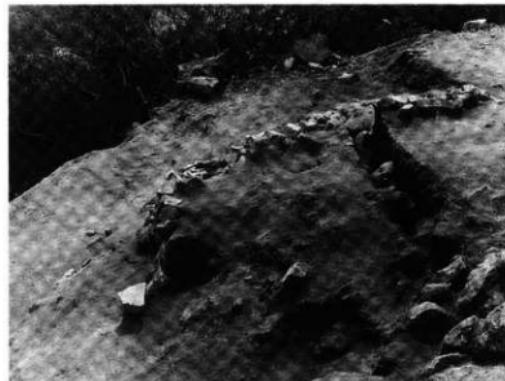
C - C' 粘土層斷面



F - F' 表土除去前斷面



郭先堆部石積断面



図版 6

郭先端部石積（東から）



D-D' 石積断面



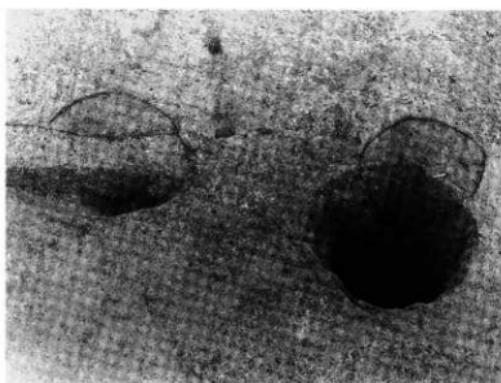
全景（南から）



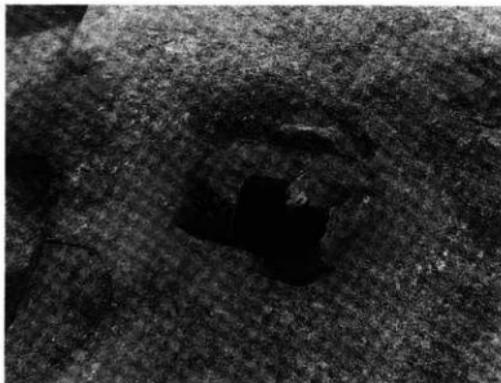
図版 7
ピット検出状況



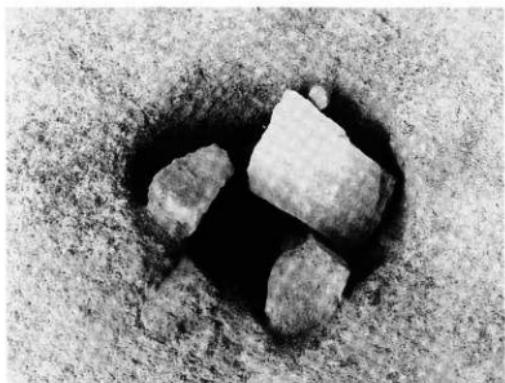
P53検出状況



ピット検出状況



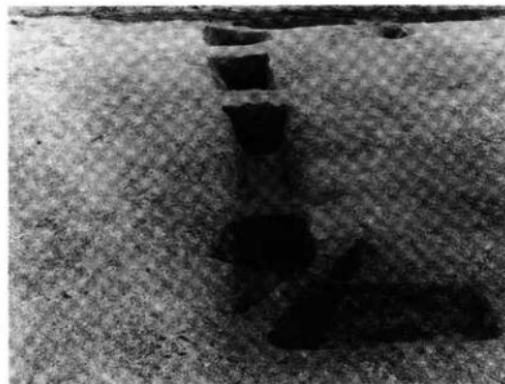
図版 8
ピット検出状況



S X 0 1 検出状況

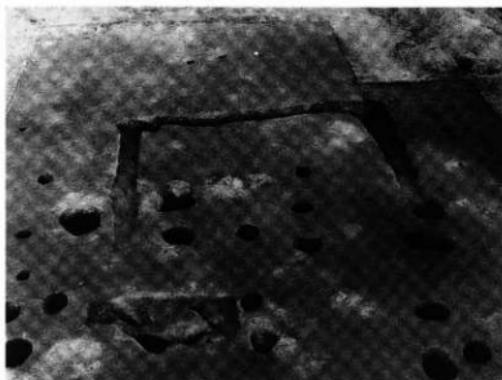


S D 0 1 断面



図版 9

SD01完掘（南から）



鳥居基礎半碎状況



鳥居基礎半碎状況

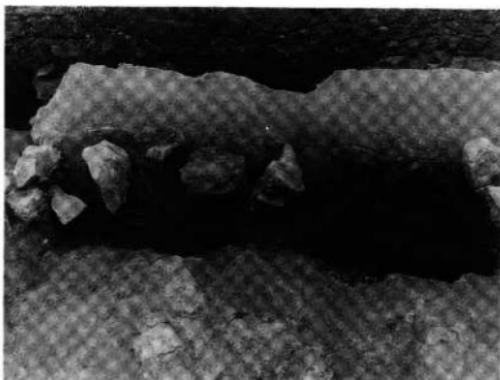


図版10

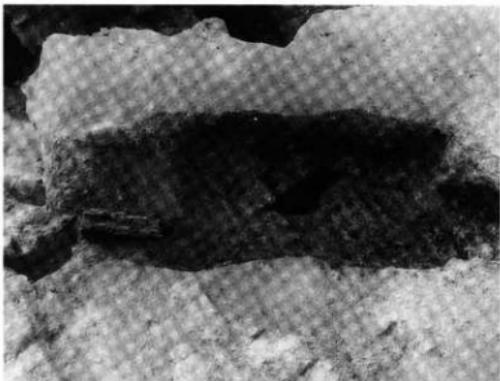
鳥居基礎完掘



S X 0 2 木片検出状況



S X 0 3 木片検出状況



図版11

ピット群全景（北から）



郭先端部ピット群検出状況



S B 0 2 (北から)



図版12

S B 0 2 (西から)



S B 0 3 (北から)



S B 0 3 (西から)



図版13

S B 0 4 (北から)



S B 0 4 (西から)



S B 0 5 (北から)



図版14

S B 0 5 (西から)

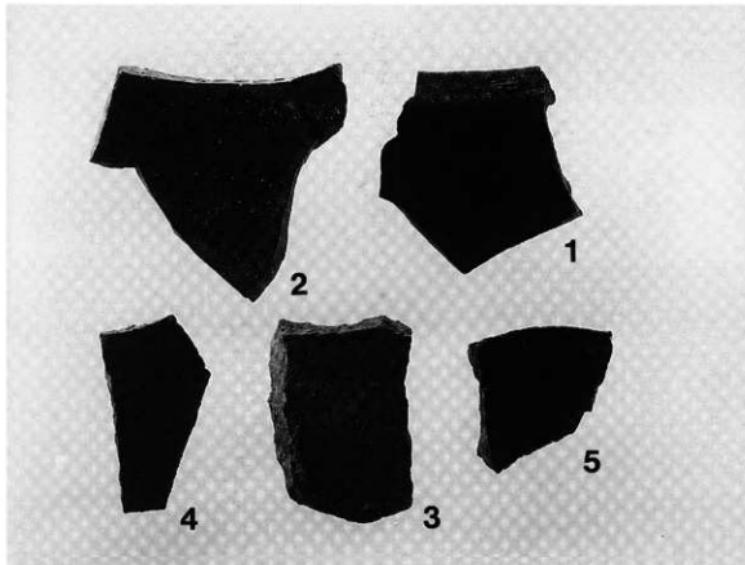


作業風景

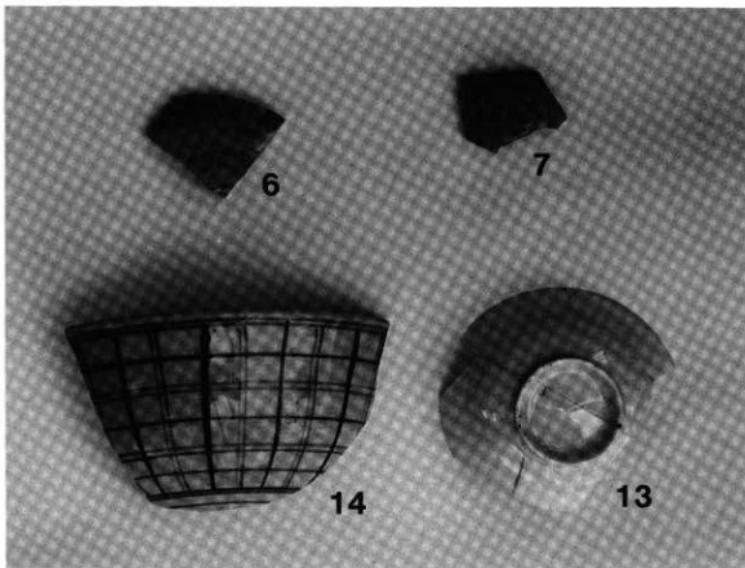


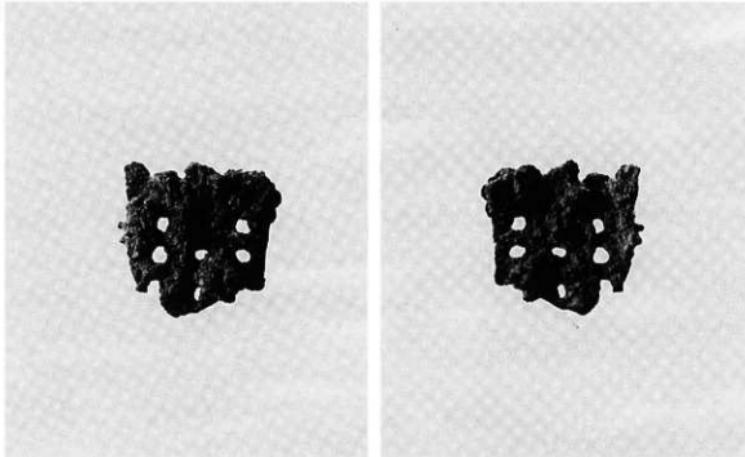
現地説明会





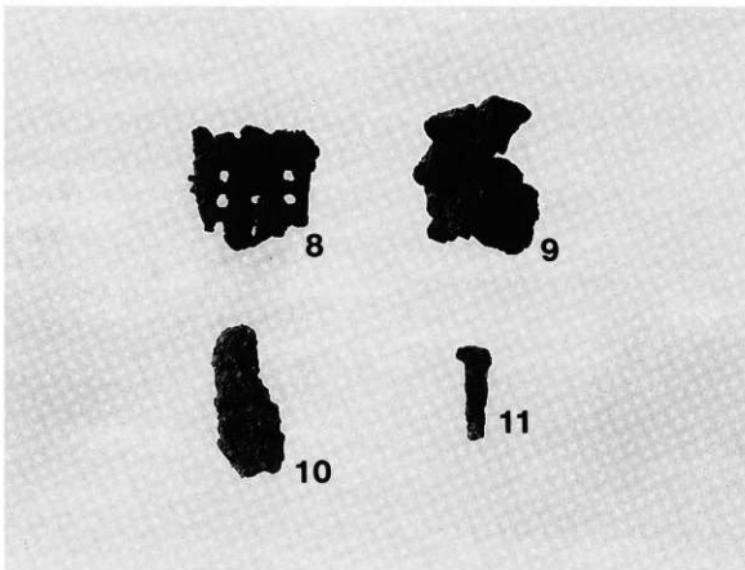
▲▼ 日和城跡出土遺物





8

▲▼ 日和城跡出土遺物



8

9

10

11

(付記) 城 跡 表

川 本 町	O - 20 永城 : 佐波氏の家臣景山氏	瑞 穂 町	石 見 町
K - 1 温湯城 : 小笠原氏	佐波氏の家臣景山氏	M - 1 布施城 : 小笠原氏	I - 1 霧井城 : 井原氏
K - 2 赤 城 : 小笠原氏	O - 21 松尾城	M - 2 銀宝城 :	I - 2 平 城 : 井原氏
K - 3 弥山城 : 小笠原氏	O - 22 奥山城 :	小笠原氏の寺本氏	I - 3 稲積城 :
K - 4 丸山城 : 小笠原氏	佐波氏の老臣奥山氏	M - 3 黒岩城 : 吉川氏	稻光内藏亮
K - 5 飯の山城 :	大 和 村	M - 4 球道城 : 高橋氏	I - 4 東明寺城 : 毛利氏
益田氏→福屋氏	D - 1 都賀原城 : 口羽氏	M - 5 別当城 :	I - 5 余勢城 : 多胡氏
K - 6 筑紫原城 :	D - 2 要路城 : 佐波氏	久永莊莊官	I - 6 源太ヶ城 :
小笠原氏	D - 3 水玉山城	M - 6 鞍懸(掛)城 :	中村康之
K - 7 正蓮寺城 :	小笠原氏	巳智備後介	I - 7 牛之市城 :
小笠原氏	D - 4 高梨城 : 小笠原氏	M - 7 烏打城 :	小林房辰
K - 8 白地城 : 小笠原氏	D - 5 宮内城 : 小笠原氏	M - 8 赤(宇山)城 :	I - 8 郡山城 : 矢上氏
K - 9 赤 城	D - 6 山南城 : 小笠原氏	出羽氏	I - 9 熊ヶ峰城 : 三宅氏
K - 10 土居城	D - 7 陣床城	M - 9 本城城 : 高橋氏	I - 10 日和城 : 小笠原氏
K - 11 会下山城 : 毛利氏	D - 8 都賀東城 : 佐波氏	M - 10 ツ山城 : 出羽氏	I - 11 吉川山城 : 毛利氏
K - 12 高 城	D - 9 尼子陣所 : 佐波氏	M - 11 大草城 :	I - 12 城名不明
邑 智 町	D - 10 潮 城 : 佐波氏	M - 12 小林城 :	I - 13 東屋城 : 領家氏
O - 1 青杉城 : 佐波氏	D - 11 天 城 : 小笠原氏	市木福屋氏	I - 14 杭ヶ打城 :
O - 2 鼓ヶ嶺城 : 佐波氏	D - 12 猿 城	M - 13 堀 城 : 堀氏	杭ヶ打彦右衛門
O - 3 丸屋城 : 佐波氏	D - 13 烈瀬城 : 口羽氏	M - 14 陣ヶ丸城	I - 15 土居城 :
O - 4 四矢城 : 佐波氏	D - 14 竹 城	M - 15 高 城 : 福屋氏	森田対馬守
O - 5 九日市城 : 佐波氏	D - 15 都賀南城 : 口羽氏	M - 16 荻原(安)城	I - 16 大の山城
O - 6 登矢ヶ丸城	D - 16 越 城 : 佐波氏	M - 17 松尾城 : 本城氏	I - 17 丸山城 : 領家氏
O - 7 花の谷城	D - 17 占 城	M - 18 信友城	I - 18 土床城 :
O - 8 京山城 :	D - 18 上 依小丸城 :	M - 19 白鹿城	上床庄右衛門
山羽氏→佐波氏	小笠原氏	M - 20 中善(車前)城 :	桜 江 町
O - 9 地頭所城 : 出羽氏	D - 19 高丸城 : 小笠原氏	小笠原氏の稻光豊前守	S - 1 鎌腰城 : 桜井氏
O - 10 京匱原城 : 出羽氏	D - 20 上野城	M - 21 野田原城 : 高橋氏	S - 2 鳴石城 : 井下春信
O - 11 小松地城	羽 須 美 村	M - 22 副城城	S - 3 江尾城 :
O - 12 久保城 : 久保氏	II - 1 鮎高城 : 志通氏	M - 23 土俵(宝大寺)城	福屋氏→森脇氏
O - 13 竜谷守城	H - 2 高畑城 : 高橋氏	M - 24 滝ノ屋谷城	S - 4 森ノ小城
O - 14 八幡城 : 佐波氏	II - 3 比丘人城 : 口羽氏	M - 25 毛 城 : 墓田氏	S - 5 市山城 :
O - 15 銅ヶ丸城 :	H - 4 賢影城 : 高橋氏	M - 26 樹光城	天野氏→桜井氏→福屋氏
佐波氏→小笠原氏	H - 5 藤掛城 : 高橋氏	M - 27 城平城	S - 6 皐敷城 : 小笠原氏
O - 16 安右エ門城 :	H - 6 木刺古城 : 高橋氏	M - 28 小屋ヶ丸城	S - 7 桜井城 : 天野氏
O - 17 木積三高城 :	H - 7 段切城	M - 29 土居城	S - 8 古城 : 桜井氏
佐波氏	H - 8 桃尾城 : 高橋氏	M - 30 小河内城	S - 9 大石城 : 福屋氏
O - 18 元山城 : 佐波氏	H - 9 幡星城 : 高橋氏	M - 31 城平城	S - 10 平野丸城
O - 19 松尾山城 : 佐波氏	II - 10 宇都井城	M - 32 陣平城	

『石見誌』上巻 石見町

『日本城郭大系14』鳥取、島根、山口 新人物往来社

『島根県遺跡地図 II (石見編)』1992年 島根県教育委員会

吉川 正氏のご教示による

報 告 書 抄 錄

ふりがな	ひわじょうあとはくつちょうさほうこくしょ							
書名	日和城跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次	石見町埋蔵文化財調査報告書 第15集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	寺脇隆彦							
編集機関	石見町教育委員会							
所在地	〒696-01 島根県邑智郡石見町大字矢上6,000番地 TEL (0855)95-1210							
発行年月日	1996年3月							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
市町村	地番	32446	J 51	34度 55分 07秒	132度 24分 01秒	19950901～ 19950930	200m ²	作業道工事
日和城跡	島根県邑智郡 石見町大学日和 3,121番地他							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
日和城跡	城跡	鎌倉時代～南北朝時代	城郭跡	陶器片、磁器片 青磁片、鉄製品 (小札、釘等)	掘立柱建物跡			

石見町文化財調査報告書 第15集
日和城跡調査報告書

発行 1996年3月

編集 石見町教育委員会
〒696-01

島根県邑智郡石見町大字矢上6,000番地
TEL (0855)95-1210

印刷 柏村印刷株式会社

邑智郡城跡分布図(付記)

0
1
2
3
4
5km

